ビデオ『ろう者偉人伝・横尾義智』の制作

D PRO ろう者歴史学チーム　　野呂　一

1. 偉人伝ビデオの作成について

昔、ろう学校の教育が手話で行われていた頃、多くのろう者が偉業をなしとげたと聞く。

その1人横尾義智は、昭和9年2月4日、新潟県東頸城郡小黒村長になった。聴者が多数を占める社会で、ろう者が自治体の長になることは大変なことである。彼は人望がたいへん厚く、終戦後に公職を追放されるまでの12年間、多難な村政をきりまわしてきた。わずか60年前の事なのに、ろう者村長が存在した事実は風化し、存在すら知らない人が多い。

ろう者自身がろう者としての生き方を考えていくためにも、こうしたろう偉人の業績を史実から学ぶことは大切なことである。しかし、たとえ母校の大先輩の偉業であっても、ろう学校ではこのような事実を教えてくれない。そこでD PROでは、ろう者の歴史的な業績を掘り起こして若いろう者たちに知ってもらおうと、チーム活動を始めた。

その第1弾として横尾義智を取り上げ、彼に関する資料収集を丹念に行い、現地教育委員会などの協力のもと、生き証人を探し出すなど、準備を進めた。そして、ろう者カメラマンによる現地でのロケ、素人役者による再現ドラマの撮影、初体験の編集作業など、多くの難関を克服し、『ろう者偉人伝・横尾義智　雪国の寒村を支えたろう者村長の生涯を追う』のビデオがついに完成した。

このビデオ作品制作のための資料収集の過程で初めて明らかになった新事実も少なくない。この作品はろう者歴史研究への関心を高めることにも寄与するものと確信している。

2. 横尾義智の生涯

義智の誕生

明治26年8月28日横尾義智は、山里の豪農、横尾義周氏の8番目の子として生まれた。上の7人は女だったので、横尾家にとっては待望の長男だったが、彼はろう者であった。

義智の父義周は、東京上野寛永寺で学び教育に熱心であった。書画を好み、自宅に自費で塾を設け、漢学者を招いて学問を教えたり、元武士を招いて武術を教えたりしていた。

明治13年から22年まで戸長をつとめ、長い間村政の発展に尽した。

幼年時代義智は、毎日石板と石筆を手に、山のふもとなどで絵を描いて楽しんでいた。ろう者のため、村の子どもたちからのけものにされたが、おおらかで明るい少年だった。

官立東京盲唖学校へ入学

明治36年4月(9歳)義智は、東京の小石川にあった官立東京盲唖学校（現、筑波大学附属ろう学校）に入学した。かなりの努力家だったという。

明治41年3月(14歳)義智は、尋常科を卒業し、同校図画科にすすんだ。卒業後も、南宗画の大家、岸浪柳渓画伯の門に入り、絵の道に精進し『柳谷』の雅号を与えられた。

塩崎サトとの結婚

大正3年5月(20歳)帰郷した義智は、3歳年下である塩崎サトと婚約した。サトは、義智の父義周と安塚銀行創立の発起人として一番苦労した塩崎貞佐久の四女で、聴者である。

同年8月に結婚式が決まった直後にサトの父貞佐久が死亡し、次いで父義周が病気で倒れてしまった。そのため、8月の足入れ婚の後、2年後の大正5年5月20日(22歳)、2人

は盛大な結婚式を挙げた。しかし、父義周は大正4年3月25日、この世を去っている。
義智はかなりの愛妻家で、妻サトのために、人力車やソリを用意し、自分は下を歩いた。サトも、夫の天分を十分に発揮させるとともに、地方きっての名門を発展させることにすべてを捧げた。妻サトの美貌もさることながら、彼らの夫婦愛は、村では評判であった。
しかし、妻サトが一番困ったことは、夫と意思が通じないことであった。筆談では、思い通りに考えを述べることができない。サトは、当時「指話術」と呼ばれた手話を熱心に学習し、通訳できるほどまでに上達した。サトの指話術は、お客にわからないように即刻通訳され、客が笑えば夫も同時に笑う、神わざのようであったと、語り草になっている。

村の発展のために絵筆を捨てる

ある夏、村道で出会った一人のやせ衰えた老婆の、主人が病気で思うように働けなくなり、天候不順で米の出来が悪く、食う物がなくなってしまった、という話に驚いた義智は、絵筆を捨てて村のために一生働こうと決意したと、後に語っている。

小黒信用購買販売組合の設立

大正7年富山で起こった米騒動は、小黒村にも影響して米価や物価が急騰し、農民の生活は苦しくなってきた。村人は窮乏にあえぎ金を借りるにも高利貸しに頼らざるを得ない。
義智は、極度に疲弊した村を救うには、村民全員が共同するしかないと思い、農家中心の経済機構をつくるために奔走した。村民に会うたび、筆談でいろいろな意見を書いてもらったり、自らも書いて渡すようにして積極的に議論を重ねていった。
大正9年7月(26歳)義智は、村長の滝沢義親、元村長の数井一郎と三人で発起人になり、数井家の広間を事務所とした小黒信用購買販売組合を創立した。(組合員数329人)小黒村全部の農家がまとまって一つの組合を作ったのは、当時としては画期的なことであった。
義智は初代組合長になった。以来、終戦後農業協同組合となるまで、29年間組合長をつとめてきた。事業内容は、信用・販売・購買のほかに、農業倉庫を建てて米の自主管理を行い、商人に安く買いたたかれることを防いだ。仕事も順調に進み、取り扱う内容も増えてきたので、大正15年、村の中央である和田に、自費で建物を作ってそこに組合を移した。
今まで『おしの組合長』と軽蔑し、不信感や反発を抱いていた村民もいたが、義智の村を愛する熱意と実行力に心を動かされ、やがて村民全体が彼を信頼するようになった。

小黒村消防組の設置

大正15年7月2日(32歳)義智は、小黒村公認消防組設置の認可がおりたことに伴い、初代組長になった。副組長は、この年2月に村長に当選した横尾正治であった。
義智は、設備の充実にも力を入れ、アメリカから自費でガソリンポンプを購入、消防組に寄付した。功績が高く評価され、消防としては最高の栄誉、金ばれんを3回授与した。
昭和12年の日華事変によって戦時体制が強化され、防空の任務も課せられるようになり、昭和14年4月1日、全国いっせいに警防団に組織替えされた。義智は引き続き小黒村警防団の団長になり、終戦まで防火思想や燈火管制に力を入れた。

ろう者村長の誕生

昭和9年2月4日(41歳)義智は、村民に推されて小黒村長に選出された。わが国で最初にして最後の、ろう者村長の誕生である。
彼の村長就任をもっとも喜んだのは、日本聾唖協会の会員たちであった。自分たちの仲間が村長になったのだ。全国各地から激励と喜びの手紙がたくさん届けられたという。

村長の仕事 ——凶作から復興へ

義智は昭和9年、村長に就任してすぐ、村政上大きな難題を突きつけられた。この年は、大雨、冷夏で小黒村は大凶作に見舞われ、六割ほどの減収で、食べる米さえとれない有り様であった。義智は、凶作の時に備えておいた、備荒米のもみ19トンを放出して急場をしのいだ。そして、単身または助役の数井要とともに、新潟県庁へ政府所有米の交付陳情のため幾たびも足を運んだ。政府は、小黒村に約35トンの政府交付米の貸し付けを決定した。

また彼は、村民の窮乏を救うために、農外収入になる救農土木工事として、県道改良工事や小黒川護岸工事を申請し、また村独自の救農工事として、村道改修工事を計画した。この工事は翌年5月から、人馬道を荷車が通れるように幅を広げ、勾配を緩やかにするなどして、3年間続けられた。現在、安塚町大字大原の中央に『村道改修記念碑』がある。

そのほか、出稼ぎ希望者が急増しても不景気で就職先が見つからないため、役場内に臨時職業紹介所を設置して、就職先の開拓に努めた。

義智は農業の復興にも力を注いだ。安塚町大字和田にある菱神社の境内の下から小黒川岸まで広がる、質の悪い水田の土地改良に取り組み、排水がスムーズになるように工夫した。そうして湿田を乾田に変えた結果、翌年には収穫が2割ほど増加した。

このほか、種もみの借用、桑苗の交付、税金の軽減など、細かいところまで気を配り、各機関に働きかけを怠らなかった。こうした義智の強力な指導のおかげで、5年間の年賦で返す約束の交付米を3年間で完納するなど、村の基礎体力は着実に高まっていった。

昭和18年、干害に見舞われてしまった時も、義智は持ち前の指導力と実行力でこの困難を乗り切った。

私設保育所の開設

昭和12年の日華事変以来、出征のために村の労働力が低下し、母親たちにかかる負担が大きくなってきた。

そこで義智は、昭和13年(45歳)に自宅を解放して、春と秋の農繁期に保育所を開設した。妻サトが中心になり、自分の家の女中を保母にしておおぜいの子どもを預かった。この私設保育所は戦後の農地解放まで続き、現在の公立保育園に引き継がれている。

村長 横尾義智の人柄

村長時代の義智を知る人々は、短気なところはあるが、礼儀正しく、品のある人だったと回想している。風貌は英国紳士風で、おしゃれに気を使い、服はすべてオーダーメイド。趣味が登山ということもあって、登山スタイルがお気に入りだったという。金色のふちがついた立派な眼鏡をかけ、金色の立派な懐中時計を持っていた。

義智は、まったく名誉欲をもたず、困っている人を見ると放っておけない人、一本気で、一度相手を信頼すると他の人の意見を聞き入れないという頑固さをもった人でもあった。また、義智は無類の酒好きでもあった。

義智は、村会はもちろん、会合に出席する前の日は、人数分すべて紙に書いて渡した。家事を終えて手伝う妻サトと、机に向かって黙々と夜を更かすことも多かったという。

しかし義智は、妻サトを村長室に入れることはなかった。サトの方も役場の仕事に対してはいっさい口出ししなかった。義智は、あくまでも筆談を基本とし、絶大な信頼を寄せていた助役を通して指示を出し、公職を円滑に遂行していたという。

村役場の焼失

昭和20年2月9日(51歳)早朝、木造2階建ての村役場が全焼してしまった。例年にない豪雪で、村自慢の消防ポンプの出動が間に合わなかったのである。義智の、村長としての

業績を示す資料のほとんどがこの火災で焼失してしまったのは、実に残念なことである。
義智は、戦時中で村の財政が苦しかったので、自ら組合長をつとめていた小黒信用購買販売組合の建物を、村役場に寄付した。そして自費で、あらたに信用組合の建物を造った。

公職追放

昭和20年8月、第2次世界大戦が終わり、翌年1月、ＧＨＱの覚書によって実施された公職追放は、行政・財政・経済の各分野における軍国主義者の追放から始まった。やがて地方の町長や村長、在郷軍人分会長にまで及んだ。
昭和21年11月12日(53歳)義智は、この公職追放により、12年間つとめた村長職を退くことになった。彼はわが国でただ1人、公職追放(パージ)に遭ったろう者でもある。
昭和25年10月13日(57歳)、1日も早く村政に戻ってほしいとの小黒村村民の訴願によって、内閣総理大臣名で公職追放を特例的に解除された。
しかしその頃義智は、農地解放で土地や財産のほとんどを失い、大地主からわずか9段1畝の自作農になっていた。彼は家庭内の事情等もあって、二度と村長職に復帰しなかった。

ろう者の福祉向上に尽す

村長在職中義智は、忙しい村政の合間に、わが国のろう者の福祉向上にも尽力した。藤本敏文や三浦浩とともに設立した日本聾唖協会では、財政部門を担当していた。聴者との意志疎通に欠き、孤立しがちなろう者の結束を固めるために、日本全国を回った。
昭和22年5月25日(54歳)、戦争で休会になっていた聾唖団体の活動を再開し、群馬県伊香保温泉木曾旅館にて全日本聾唖連盟が発足した。義智は、常任委員になり、昭和25年に全日本聾唖連盟が法人化されてからは引き続き理事職に就いた。そして、昭和28年5月（60歳）義智は、活動の中心を若手に譲り、名誉顧問になった。
義智は、もちろん地元の新潟県ろうあ協会の再建、北信越ろうあ連盟などの結成にも力を尽くした。また、母校である東京聾唖学校だけでなく、新潟県立長岡聾唖学校に対しても、寄付や優等生の賞与、卒業生の就職先開拓など援助を惜しまなかった。現在のろう団体の活動のかげには、義智の力が大きく働いているのである。

横尾義智の死去

昭和28年2月、良妻賢母といわれ、新潟県の婦人運動の指導的立場にあった妻サトが、姉の嫁ぎ先で倒れ、1ヶ月後の昭和28年3月18日(義智59歳)、死去した。
妻の亡き後義智は、すっきり健康を害し、新潟県高田市の別荘で療養していたが、昭和38年2月9日、安らかに息を引き取った。享年69歳であった。

【参考文献】

「家の光」　家の光協会
「越佐人物史」　野島出版
「越佐人名辞書」　歴史図書社
「キング」　大日本雄弁会講談社
「筑波大学附属聾学校同窓会百年史」「同窓会名簿」　筑波大学附属聾学校同窓会
「新潟県人物百年史」　東京法令出版社
「日本聴力障害新聞」「日本聾唖新聞」「日本聾唖ニュース」財団法人全日本ろうあ連盟
「東頸城郡誌」　新潟県東頸城郡教育会
「安塚町史」　新潟県東頸城郡安塚町教育委員会
「聾唖の光」　聾教育福祉協会